



TITLE:

<サーベイ論文>J.F.フリースにおける「哲学」の概念と方法 -- 「心理主義的カント解釈」というフリース像の再検討にむけて--

AUTHOR(S):

太田, 匡洋

CITATION:

太田, 匡洋. <サーベイ論文>J.F.フリースにおける「哲学」の概念と方法 -- 「心理主義的カント解釈」というフリース像の再検討にむけて--.
哲学論叢 2016, 43: 53-64

ISSUE DATE:

2016

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/219148>

RIGHT:

J.F.フリースにおける「哲学」の概念と方法

——「心理主義的カント解釈」というフリース像の再検討にむけて——

太田匡洋

1. J.F.フリースの位置づけとその問題点

1.1 J.F.フリースとは

本稿の目的は、ヤーコプ・フリードリヒ・フリース（1773-1843）の哲学の一般的評価を概観して、その問題点を整理することである。

フリースは、19世紀に活躍したドイツの哲学者であり、いわゆる「ドイツ観念論」として知られるラインホルトやフィヒテ、シェリング、ヘーゲルらとほぼ同時代人にあたる。彼はカントの批判主義を徹底することで、狭義の「ドイツ観念論」に対立した立場を形成しており、ヘーゲルが『法の哲学』においてフリースを名指しで批判していることは有名である（cf. Hegel, 1971, S.18）。今日でこそフリースは忘れられがちな思想家であるが、ドイツ思想史研究者として知られるフレデリック・バイザーが指摘しているように、同時代においては強い影響力を有しており、また後に成立した「フリース学派」と呼ばれる学派は、当時の自然哲学における一大潮流を形成している（Beiser, 2014, p.24）。また、哲学教育としての「ソクラテス的方法」の創始者であるレオナルト・ネルズンは⁽¹⁾、哲学者としてのキャリアをフリース研究から始めている。彼のキーワードである「理性の自己信頼」は他ならぬフリースによる術語であるほか、ネルズンを中心とした「新フリース学派」の存在は、新カント派、とりわけカッシーラーをはじめとしたマールブルク学派との対立関係を形成するなど、重要な役割を演じている（Beiser, 2014, p.2, 25）。

その反面でフリースの哲学は、哲学史上の様々な場面において、「カントへの心理学的アプローチ」（Beiser, 2014, p.24）ないし「心理主義（psychologism）」（Beiser, 2014, p.79）として批判の対象とされてきた。ここでの「心理主義」という概念は、場面に応じて様々な意味を担わされるが、最終的にフリースはこれらのレッテルとともに哲学史の舞台から葬り去られることとなる。

本稿では、フリースの哲学が「心理主義」と見なされるに至った過程と、それに対するフリース哲学側からの応答を概観する。まず、フリースに対する同時代の評価を見ていくことで、「心理主義」という評価が成立した背景を通時的に確認するとともに、フリースに対する評価の変遷の一つのラインを呈示する。次に、このような従来の評価に対して再検

討すべき主要な論点と、それに対するフリースの哲学の側からの応答について確認する。

1.2 フリースの哲学に対する現在までの評価

1.2.1 辞書的説明 —— 「心理主義」としてのフリース

現在の哲学史理解においてフリースが占める位置づけを端的に示したものとして、まずは『歴史的哲学事典』における「心理主義」の項目が挙げられる。

J.F.フリースは、カントの批判主義を修正して完成する試みのなかで、純粹理性の批判に対して、哲学的・人間学的な、超越論的・心理学的な解釈をもたらした。[...] 心理学的批判と（形而上学的）理性論のもつ一致と差異についての〔フリースによる〕理解は、もはやカントのそれとは異なっており、すでに新カント派によって心理学的で人間学的な偏見として非難されたものである。（Janssen, 1989, S.1677）

この『歴史的哲学事典』の解説は、今日における一般的なフリース像——カント哲学を「心理学的」に解釈した「心理主義者」にして、いわゆる正当な「カント主義」から区別されるべき傍系というフリース像を、端的に表現している。そして、このようなフリース像は、哲学史研究の枠内に留まらない影響力を有してきた。次節ではその一例として、カール・ポパーの「フリースのトリレンマ」を取り上げる。

1.2.2 カール・ポパーの「フリースのトリレンマ」

カール・ポパーは『科学的発見の論理』において、「基礎言明」の正当化の問題を取り上げる。そして、この問題に対する従来の立場を、フリースの著書⁽²⁾の記述に即して三種類のパターンへと類型化したうえで、これを「フリースのトリレンマ」と呼んでいる⁽³⁾。

経験の基礎 [...] の問題にフリースほど深刻に苦勞した思索家は少ない。彼は、もし科学の言明が独断的に（*dogmatically*）受容られるべきでないとするれば、われわれはそれを正当化できねばならぬ、と考えた。[...] すべての言明は〔他の言明によって〕論理的に正当化されなければならないという（フリースによって「証明好み」と評された）要求は、それゆえ無限後退に陥らざるをえない。そこでもしわれわれが独断論の危険と同時に無限後退の危険を避けようとするれば、心理主義（*psychologism*）、つまり言明は言明によってだけでなく、また知覚によっても正当化できるという説に頼るしかないように思われる。この三者択一——^{トリレンマ}独断論 対 無限後退 対 心理主義——に

直面して、フリースおよび彼に組して経験的知識を解明しようとするほとんどすべての認識論者は、心理主義を選んだ。(Popper, 1959, p.75, 邦訳, 114 頁以下)

このようにポパーは、「言明」の正当化のパターンを、フリースを典拠とするかたちで「独断論」「無限後退」「心理主義」の三つに類型化したうえで、フリース自身の立場を「心理主義」に分類し、ポパー自身はこのトリレンマそのものを退ける。このポパーの記述は、フリースの哲学がもつ隠れた存在感を示唆していると同時に、「心理主義者」としてのフリース像を象徴するものともいえるであろう。

1.3 何が問題なのか

それでは、フリースの哲学を再検討することはいかなる意味をもつのであろうか。結論から述べると、上述のようなフリース像は、19 世紀末に成立した一面的なものに過ぎない。そして後に見るように、フリースが生きていた当時においては、そもそもフリースの哲学は必ずしも「心理主義」と見なされていたわけではないのである。

バイザーは、「ラインホルト、フィヒテ、シェリングに関する最も注目すべき批判をもたらした、フリースによる 1803 年の『ラインホルト・フィヒテ・シェリング』は、まさに新カント派にとっての原典である」(Beiser, 2014, p.4) と述べて、近代ドイツ哲学におけるフリースの重要性を指摘する。フリースの哲学および「フリース学派」は、19 世紀ドイツ哲学において、狭義のドイツ観念論に対するオルタナティブを形成しており、後には新カント派のマールブルク学派に対立する一つの学派（「新フリース学派」）を形成する (Beiser, 2014, p.25)。このように、フリースの哲学の再検討は、カント以降の哲学史そのものの再評価と切り離しがたく結びついており、フリースの哲学をその実相に即して再構成することは、19 世紀から 20 世紀にいたるドイツ哲学史を再評価するための必須の要件といえよう。そのためにはまず、今日におけるフリースの評価が、すなわち「フリースの哲学は心理主義なのか」という問題が問い直される必要がある。

2. フリースにおける「心理主義」という評価の成立過程

以上を踏まえて本節では、フリースに対する「心理主義」という評価の例を、その成立過程に即して通時的に確認する。なお同時代の受容状況については、ヘーゲル研究者の速川治郎が羅列的な仕方で文献を紹介しているが、本節ではもっぱら「心理主義」という評価の成立過程という観点から整理を行い、速川の言及がある場合はあわせて指摘する。

2.1 ヘルバルト —— 「心理学」との結びつき

フリースを「心理学」と結びつけて批判した最初期にして最大の哲学者の一人として、彼と同時代に活躍したヨハン・フリードリヒ・ヘルバルトが挙げられる。ヘルバルトは『一般形而上学ならびに哲学的自然学緒論』のなかで、以下のような言及を残している。

カントの教説（これはフリースや他の者達が扱っているが）の大部分は、でたらめな心理学に依存している。そして、心理学から生じたり類推によって引き起こされたすべての可能な誤謬によって満たされている。(Herbart, 1828, S.121)

カントの基礎となっているのは——経験的心理学だ。これに疑念のある者に対しては、フリースを教えよう。(Herbart, 1828, S.123)

フリースが極めて正しくも気づいたように、カントの批判の根底には、経験的心理学を除いてはいかなる明白な基礎もありはしない。(Herbart, 1828, S.245)

このようにヘルバルトは、おもに「心理学」という概念との関わりにおいて、フリースの名前を批判的な仕方引き合いに出す。ヘルバルトの狙いは、カント哲学そのものを「心理学」へと還元したうえで、それを「誤った心理学」として批判して、より正当な「心理学」として自らの立場を構築することにある。そしてここでは、そのような「正当な」カント理解の典拠として、フリースの哲学が参照されている。

2.2 ヘーゲル学派 —— カント哲学からの乖離

しかし後のヘーゲル学派においては、フリースによるカント理解そのものが批判の対象とされるようになる。その端緒となったのが、速川 (1986) でも挙げられている⁽⁴⁾、クーノ・フィッシャーによる批判である。フィッシャーは 1862 年の講演「イエーナにおける二つのカント学派」において、イエーナにおけるカント受容の系譜を、①ラインホルト・フィヒテ・シェリング・ヘーゲルの系譜、②フリースに至る系譜、という二つの系譜へと区分したうえで、フリースの哲学を以下のように批判している。

フリースによれば哲学的な基礎学問は形而上学ではなく、内的自然学という意味での人間学、すなわち心理的人間学である。[...] この人間学的基礎に理性批判は基づいており、形而上学的認識、彼の分類における哲学の体系は、この人間学的基礎によって

根拠づけられる。／カントの批判は人間学的であろうとしたのではない。ここにカントとフリースの相違があり、それゆえにフリースにとって、自身の意味での理性批判を刷新することは必然であった。彼はこの刷新を、その『新理性批判』において行ったが、この本はカントの理性批判の人間学的改造にほかならず、その大部分はカントの理性批判を経験的心理学の言葉へと翻訳したものに他ならない。(Fischer, 1862, S.14)

このような理解の上で、フィッシャーは「理性批判は人間学的であるのか、そうあることが許されるのか」(Fischer, 1862, S.17) という問いを立て、この問いに否と答えることで、フリースを斥ける。

フリースの答えによれば、理性批判が発見するものはア・プリオリであるが、発見そのものはア・ポステリオリである。理性批判の認識の対象はア・プリオリだが、その認識それ自体は経験的である。[…] このような解明のうちに、フリースのあらゆる教説、その教説による理性批判のあらゆる再形成が根拠づけられている。[…]／そして、まさにこの点において、フリースの哲学のうちには第一の誤謬が存しているのである。ア・プリオリなものは、決してア・ポステリオリに認識されることはできない。(Fischer, 1862, S.18)

このようにフィッシャーは、フリースの「理性批判」を「人間学」という言葉によって定式化したうえで、それをカント哲学の本質を捉え損なったものとして批判する。また、ここで登場する「ア・プリオリなものはア・ポステリオリに認識されうるか」という論点は、フリース批判の主要論点として、後世においてもしばしば再現されることとなる。

このような「人間学的」かつ「カント哲学から乖離した」というフリース像は、後のヨハン・エドゥアルト・エルトマンの哲学史記述においても再現される。エルトマンは1886年の『哲学史綱要』において、フリースの哲学における「経験的-心理学的」ないし「人間学的」な側面を批判的に叙述することで、カント哲学との相違を強調する。

カントからの相違としてフリース自身が申告しているところによれば、彼はカントによる探究を経験的-心理学的、あるいは人間学的な探究へと変えたのであり、それによってかの「フリース自身が言うところの」「超越論的なものの先入見」から遠ざかったのである。(Erdmann, 1866, S.397)

このようにしてエルトマンは、カント哲学からのフリースの乖離を強調し、それをフリースの瑕疵として批判的に叙述する。そして、フリースの哲学全体を「人間学的-批判的探究」ないし「人間学主義 (Anthropologismus)」(Erdmann, 1866, S.399) という言葉によって特徴づける。

2.1 新カント派 —— 「心理主義」の成立

以上のようなヘーゲル学派によるフリース批判は、新カント派にも引き継がれる。その出発点となったのが、速川 (1986) でも名前を挙げられている⁽⁵⁾、オットー・リープマンである。彼は一般に新カント派の出発点と見なされているが (Beiser, 2014, p.3. cf. 渡邊, 2013)、その『カントとその垂流』のなかで、フリースの哲学を次のように要約している。

カントの批判がもつ本来の意図を心理学的なものに見なすのは、カントの批判に対して起こりうる最も悪意ある誤解である。ついでながら、フリースの誤解はこれだけに留まるものではない。[...] / この点におけるわれわれの判断の総括は、クーノ・フィッシャーとともに手短にまとめることができる。/ ア・プリオリなものは、決してア・ポステリオリに認識されることはできない。(Liebmann, 1865, S.151)

そしてリープマンは、「[カント哲学の] いかなる改良でもなく、ロックの経験主義への後戻りに過ぎない」(Liebmann, 1865, S.150) としてフリースの哲学を一蹴する。ここでは「カント哲学からの乖離」というフィッシャーらの批判の方針が引き継がれつつも、フリースを特徴づけるキーワードがヘーゲル学派らの「人間学」から「心理学」へと移行している。

この論点を哲学史記述において踏襲したのが、速川 (1986) でも名前を挙げられている⁽⁶⁾、ヴィルヘルム・ヴィンデルバントによる記述である。ヴィンデルバントは、1880 年に出版された『近世哲学史』の第 71 節「心理主義 (Psychologismus)」の項目において、フリースをベネケと一緒に扱っており、次のように述べている。

しかしカント以降の哲学の、このようなすべての形而上学的な努力のうちに、哲学的精神の創造的な進展があったことは疑いえない。さてこのような努力の隣では、別の試みの系列が闊歩している。それは、人間的理性の自己認識の批判的原理を経験的心理学の言葉へと翻訳し、認識理論を基礎づける探究を、極めて意識的に人間学的経験へと移す試みである。[...] / このような心理主義者 (Psychologisten) のなかで最も重要な人物の一人はそのまま、このような経験的-心理学的な基礎づけという仕方

ントの体系そのものにかかわった最初の人物である。ヤーコプ・フリートドリヒ・フリースは、[...] その主著『新理性批判』(1807)においてカントの教説を心理学的な見方に基づけようとしたのであり、この見方を『心理的人間学の手引き』において、実際にまた術語のうえでより厳密に確定し、他の哲学の全パートにわたる数多の著作においてそのさらなる実現をしたのである。(Windelband, 1880, S.386f.)

そして、フリースの哲学を次のように要約する。

フリースの場合、[哲学体系を構成する] 諸々の理論は、たんに人間学的な探究という共通の土台に基づいて、経験的心理学の教説として現われるのであり、そのことが彼の固有かつ独自の立場の本質をなしている。(Windelband, 1880, S.390)

このようにして、いわゆる「心理主義者」としてのフリース像は、新カント派、特にヴィンデルバントの哲学史記述において完成をみることとなる。

以上で見てきたように、もともとフリースの哲学が「心理学」と結びつけられたのは、カント批判という文脈において、カント哲学自体を「心理学」へと還元するという戦略のもとで、「正当な」カント解釈の典拠としてであった。しかし、後のヘーゲル学派の哲学史記述において、フリースの哲学は「誤ったカント理解」としてカントから引き剥がされる。そこに新カント派の哲学史記述が「心理主義」というレッテルをはることで、「カント哲学を心理主義化した傍系」という現在に至るフリース評価が成立したと考えられる。

2.4 異なる評価の一例 —— アプリオリズムとしてのフリース理解

しかし、このようなフリースに対する「心理主義者」という評価は、歴史的に見ても一面的なものに過ぎない。このような評価に対する反例の一つとして、同時代にライプツィヒで私講師を務めていたエミール・フェルディナント・フォーゲルの論考を挙げたい。

フォーゲルは、1843年の「シェリングかヘーゲルか、いずれでもない何者か？」という論考のなかで、フリースの哲学を中心的に扱っている。彼は、当時隆盛を誇っていたシェリングとヘーゲルの対立図式に対抗して、第三極をなすものとしてフリースを取り上げ、カントの批判哲学を受け継いだ哲学者として高く評価する (Vogel, 1843, S.13)。そのうえでフリースがカントと共有している「あらゆる経験から独立した純粹概念」(Vogel, 1843, S.16)を認める立場を「論点先取」(Vogel, 1843, S.16)として批判し、そのような概念の不可能性を証明してみせたとしてジョン・ロックの優位を主張する (Vogel, S.20, 25f.)。

ここで注目すべきは、フリースがカントに並んでいわゆる「ア・プリオリな原理」を承認した人物として、すなわちアプリオリズムの代表として批判の対象とされている点である。このようなフリースの評価は、リープマンによるものとは明らかに距離がある。このように、同時代におけるフリース理解は、いわゆる「心理主義」に収まるものではない。

3. 問題の所在 —— 「哲学」の定義とその方法

前節では、フリースの哲学に対する「心理主義」という評価が成立するに至った経緯を概観した。ここから見返すかたちで本節では、主要な問題点をフリースの哲学に即して呈示して、焦点となるべきトピックを確認する。

3.1 「哲学」と「理性批判」の区別

ここまで、フリースの哲学が「心理主義」と評価されるに至った経緯を概観した。そこで争点とされた主要な論点は、フィッシャーらの指摘に見られるように、「ア・プリオリなものはア・ポステリオリに認識されうるか」という問題であった。これはフリースに即していえば、「体系」としての「哲学」と、その認識に至る方法を扱う「理性批判」のあいだの関係に対応する問題であり、上述のフィッシャーやカントによせていうならば、「形而上学的認識」と「超越論的認識」のあいだの関係へと還元される。フリースによれば、「哲学」は「体系的統一」(Fries, 1803, S.245)をもつ「学問」であり(Fries, 1803, S.245; Fries, 1807b, S.8; Fries, 1824, S.2; Fries, 1831a, S.3f)、そのような意味での「哲学」は、「論理学」と「形而上学」へと区分される(Fries, 1824, S.39)。しかし同時にフリースは、このような「哲学」とそこへと至るための「方法」を区別する。そして、この「方法」に関する探究を「理性批判」(Fries, 1804, S.32; 1824, S.54; 1828, S.49)と呼び、このような「批判」が「哲学」には必ず先行せねばならないと指摘する。

[...] この最初の哲学的研究は、つねに批判的なものとならねばならないこととなる。すなわち、理性が自己自身の見識を得るための——とりわけいかにして理性のみから認識が生じうるのかという点に関しての——理性の探究でなければならない。

[...] /それゆえ、すべての哲学すること(philosophieren)は、批判とともに始まるべきである。(Fries, 1803, S.269)

フリースは、この「理性批判」の手段を、「内的な自己観察」(Fries, 1824, S.126)に見いだす。その理由は、「すべての人間的認識は感性的知覚とともに開始される」(Fries, 1824,

S.80) ためである。だがそれは「普遍的で必然的な諸真理に関して感性的知覚に由来して」(Fries, 1824, S.80) いることを意味するわけではない。これらの「諸真理」自体はあくまでも「理性」が「人間的認識の純粋に理性的な形式として根源的に所有する」(Fries, 1824, S.80) ものであるとされる。このような「哲学」(ないし「形而上学」)と「理性批判」の関係こそが、一般にフリースの独自性と思なされる同時に、フィッシャーによる批判の焦点とされた。それゆえフリースの問題の根は、まずは「理性批判」と「哲学」の区別のうちに認められる。フリース研究の皮切りとなったネルズンは、この区別を強調することで、フィッシャーらの批判に応答するとともに、フリースの「理性批判」の妥当性を主張する。

理性批判は、上で挙げた定義の通り、まず第一に形而上学の可能性あるいは不可能性に決着をつけるものであって、それゆえどんなことがあろうとも形而上学から区別された学問でなければならない。それゆえにカントは、批判を形而上学のための予備学と呼んだのである。それゆえ、たとえ経験的心理学が形而上学から追放されねばならないとしても、それによって理性批判からも追放されねばならないわけでは決していない。(Nelson, 1905, S.278)

この点に関して、速川治郎もフリースを擁護する立場から、同様の主張を行っている。

フリースは次のように言う。「批判は哲学ではなく、哲学に達するために哲学的思索 [Philosophieren] をすることである。われわれはドグマティズムの欠点を非難するが、この欠点たるやドグマティズムがまず哲学的思索をすることを教えずに、いきなり哲学を示すことにある」[...] / 以上のことから、フリースにおいては『新批判』が哲学ではなくて、『形而上学』こそが哲学であるということになる。フリースも「哲学は論理学、思弁的形而上学、実践的哲学から成り立っている」と言っている。(速川, 1987, 148 頁以下)

このようにフリースを擁護する立場においては、「哲学」へと至るための方法としての「理性批判」と、両者のあいだの峻別が重視され、その妥当性が主張される。そしてフリースが「心理学」ないし「人間学」という既存のトピックを引き合いに出すのは、後者の「理性批判」のための手段としてに過ぎないとされる。この関係についてドイツ観念論研究者のヴォルフガング・ボンジーペンは、フリース自身の狙いを次のようにまとめている。

アンチノミーによってカントは、哲学を一つの最高原則から導出しようとしたラインホルトとフィヒテのための道を用意した。これに反してフリースによれば、ただ経験的学問としての人間学の立場に基づくことによってのみ、理性批判は可能となる。フリースは理性批判を経験主義的に理解したわけではなく、理性批判のうちに内的経験を取り入れたのであり、かかる内的経験の反省的で追隨的な解明によってのみ、われわれのア・プリオリな認識の本性と性状を確定することが、われわれにとって可能となるのである。それゆえ超越論的認識が意味するのは、内的経験による哲学的-批判的認識である。(Bonsiepen, 1997, S.326)

3.2 同時代における理解

以上で概観したように、フリースの哲学の焦点となるトピックは、体系としての「哲学」ないし「形而上学」と、その方法としての「理性批判」の峻別にある。しかしこの論点は、フリースを哲学史のなかで再検討するうえで、すなわち当時のフリース理解にとって、いかなる意義をもつのであろうか。当時におけるフリース理解の一例として、同時代の哲学者であるアルトゥール・ショーペンハウアーの手稿の記述を見てみたい。彼は 1812 から 13 年にかけて、フリースの『新理性批判⁽⁷⁾』の読書ノートを残しているが、その中で次のように述べている。

見ること (*Sehn*) と、見ているということを知ること (*Wissen daß man sieht*) とを区別するのは無意味である。というのも、後者は前者のうちに存しているからである。同じく、数学的法則や哲学的法則を知ること (*Wissen*) と、この知ることについて知ること (*Wissen vom diesem Wissen*) を区別するのは無意味である。なぜならば、後者は前者の抽象的認識、要約、縮小に過ぎないからである。(Schopenhauer, 1967, S.361)

ここで「見ること」および「知ること」は、「理性」による対象の認識、すなわち「哲学」に相当し、「見ているということを知ること」および「知ることについて知ること」は、「理性」についての自己認識、すなわち「理性批判」に相当する⁽⁸⁾。ショーペンハウアーの読書ノートには「心理学」や「人間学」といった今日のフリース像を象徴するキーワードは基本的に登場しない。彼はフリースの哲学の力点を「哲学」と「理性批判」の峻別のうちに見たうえで、その論証の妥当性を問題にしている。この一例が示唆するように、フリースの同時代の哲学者たちは、「カントの心理学化」という今日的なフリース理解を自明の前提とはしておらず、むしろ焦点とされるべき論点を正しく理解したうえで、その哲学を

——相互批判のうえでの戦略としてわざと歪めたかたちで引き合いに出すことはありえ
たにせよ——各々の思想形成のための試金石としていた可能性がうかがわれる。

4. まとめ

以上で見たように、フリースの哲学に対する「心理主義」という評価および批判は、その受容の過程で生み出されたものである。このようなフリース像は、フリースの哲学の理解としては不当な歪曲を含むものであり、また哲学史から見ても一面的な評価に留まる。

この評価のきっかけにもなったフィッシャーによる批判は、フリースに即せば「哲学」とその方法としての「理性批判」の峻別という問題へと還元される。本稿ではこの問題をトピックとして呈示するに留まったが、そもそもフィッシャーの批判の矛先は、その内実の妥当性である。この問題は後の時代、特にマールブルク学派によって、「権利問題」という観点から論争の対象とされる (Beiser, 2014, p.81f.)。それゆえ、「理性批判」の内実の吟味と、その「権利問題」という観点からの検証が、フリースの全体像を明らかにするための次の課題となるであろうが、この問題については別稿を期すことにしたい。

註

- (1) 「ソクラテス的方法」に関するネルゾンの先駆性と現代における影響力については、寺田 (2000; 2001; 2002)、太田 (2014) などが紹介している。
- (2) ここでポパーが挙げているのは Fries (1828; 1831a; 1831b) である。
- (3) Popper (1959) は Popper (1935) をポパー本人が英訳したものであるが、その原型となった 1930 年から 33 年にかけて書かれた草稿である Popper (1979) では、「カントとフリース」という章が設けられて両者の異同が論じられている。なお、ポパーがフリースの哲学に馴染みをもつに至ったのは、彼の学友であったレオナルト・ネルゾンの影響であるといわれている。Cf. 寺田 (2001, 71 頁)。
- (4) Cf. 速川 (1986, 5 頁以下)。
- (5) Cf. 速川 (1986, 8 頁以下)。
- (6) Cf. 速川 (1986, 9 頁以下)。
- (7) Fries (1807a; 1807b; 1807c)。なお Fries (1829; 1831a; 1831b) は、同書を改版した際に、内容を部分的に改訂してタイトルを改めたものである。
- (8) これらの表現はフリース自身によるものであり、彼は次のように述べている。「[何かを] 知ることについて語ることができるためには、[たんにその何かを] 知るというのでは不十分であり、知ること (daß) と、何を知るのか (was) を、まず知らなければならず、まずは認識が再び意識されねばならない。[...] そういうわけで、あらゆる人が多くの数学的法則や哲学的法則を知ったり認識したりしており、自分がそれを知っているのを意識することなく、それに従って判断したり行為したりする。だが数学や哲学を学問的に学ぶことで、これらの法則はそのものとして自分達のうちに再び見いだされる。つまり例えば、変化を認めたらその原因を探すというのはあらゆる人がすることだが、しかしただ哲学することによってのみ、因果法則というものがそのものとして意識されるのである。」(Fries, 1807a, S.69f.)

文献

- Beiser, F. (2014). *The Genesis of Neo-Kantianism, 1796-1880*, Oxford: Oxford University Press.
- Bonsiepen, W. (1997). *Die Begründung einer Naturphilosophie bei Kant, Schelling, Fries und Hegel: Mathematische versus spekulative Naturphilosophie*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.
- Erdmann, J.E. (1866). *Grundriss der Geschichte der Philosophie, Zweiter und letzter Band: Philosophie der Neuzeit*,

- Berlin: Verlag von Wilhelm Hertz.
- Fischer, K. (1862). *Die beiden kantischen Schulen in Jena: Rede zum Antritt des Prorektorats, den 1 Februar 1862*, Stuttgart: Gotta'scher Verlag.
- Fries, J.F. (1803). *Reinhold, Fichte, Schelling*, Leibzig: August Lebrecht Reinicke.
- (1804). *System der Philosophie als evidente Wissenschaft*, Leipzig: Johann Conrad Hinrichs.
- (1807a). *Neue Kritik der Vernunft, Erster Band*, Heidelberg: Woehr und Zimmer.
- (1807b). *Neue Kritik der Vernunft, Zweiter Band*, Heidelberg: Woehr und Zimmer.
- (1807c). *Neue Kritik der Vernunft, Dritter Band*, Heidelberg: Woehr und Zimmer.
- (1824). *System der Metaphysik. Ein Handbuch für Lehrer und zum Selbstgebrauch*, Heidelberg: Christian Friedrich Winter.
- (1829). *Neue oder anthropologische Kritik der Vernunft, Erster Band, zweite Auflage*, Heidelberg: Christian Friedrich Winter.
- (1831a). *Neue oder anthropologische Kritik der Vernunft, Zweiter Band, zweite Auflage*, Heidelberg: Christian Friedrich Winter.
- (1831b). *Neue oder anthropologische Kritik der Vernunft, Dritter Band, zweite Auflage*, Heidelberg: Christian Friedrich Winter.
- 速川治郎 (1986). 「フリースと心理主義 (一)」, 『早稲田人文自然科学研究』, 第 30 号, 1–20 頁.
- (1987). 「フリースと心理主義 (三)」, 『早稲田人文自然科学研究』, 第 32 号, 145–159 頁.
- Hegel, G. W. F. (1971). *Werke in zwanzig Bänden: Theorie-Werkausgabe, Band. 7*, Hrsg. v. E. Moldenhauer u. K. M. Michel, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.
- Herbart, J.F. (1828). *Allgemeine Metaphysik nebst den Anfängen der philosophischen Naturlehre, Erster, historisch-kritischer Teil*, Königsberg: August Wilhelm Unzer.
- Janssen, P. (1989). 'Psychologismus,' in Joachim Ritter und Karlfried Gründer (Eds.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie, Band 7: P-Q* (pp.1675–1678), Basel: Schwabe & Co. AG Verlag.
- Liebmann, O. (1865). *Kant und die Epigonen: Eine kritische Abhandlung*, Stuttgart: Karl Schoder.
- Nelson, L. (1905). 'Jakob Friedrich Fries und seine jüngsten Kritiker,' *Abhandlungen der Fries'schen Schule. Neue Folge, I*, 233–319.
- 太田明 (2014). 「レオナルド・ネルゾンと〈理性の自己信頼〉(1) ——レオナルド・ネルゾンとは」, 『論叢 (玉川大学文学部紀要)』, 第 55 号, 105–129 頁.
- Popper, K. (1935). *Logik der Forschung. Zur Erkenntnistheorie der modernen Naturwissenschaft*, Wien: Springer-Verlag.
- (1959). *The Logic of Scientific Discovery*, London and New York: Hutchinson&Co. (1971, 大内儀一訳『科学的発見の論理』, 恒星社厚生閣)
- (1979). *Die beiden Grundprobleme der Erkenntnistheorie : aufgrund von Manuskripten aus den Jahren 1930-1933*, hrsg. von Troels Eggers Hansen, Tübingen: J.C.B. Mohr.
- Schopenhauer, A. (1967). *Der handschriftliche Nachlaß, zweiter Band*, hrsg.von Arthur Hübscher, Frankfurt am Main: Verlag von Waldemar Kramer.
- 寺田俊郎 (2000). 「『拝啓、ソクラテス者のみなさま』」, 『臨床哲学のメチエ』, Vol.7, 20–23 頁.
- (2001). 「レオナルト・ネルゾンのソクラテス的方法」, 『臨床哲学』, 第 3 号, 61–72 頁.
- (2001). 「ネルゾンの播いた種——バーミンガムに集まったソクラテス者たち」, 『臨床哲学のメチエ』, Vol.10, 25–31 頁.
- Vogel, E.F. (1843). *Schelling oder Hegel oder Keiner von Beyden?: Ein Separat-Dotum über die Eigenthümlichkeiten der neueren deutschen Philosophie, mit besonderer Beziehung auf die, von Herrn GH. Prof. D. Friedrich Jacob Fries zu Jena in seiner „Geschichte der Philosophie“ neuerlich hierüber ausgesprochen Ansichten*, Leipzig: Verlag der Rein'schen Buchhandlung.
- 渡邊浩一 (2013). 「なにゆえ「カントに還らねばならない」のか ——リープマンの『カントとエピゴーネン』について」, 『日本カント研究』, No.14, 168–182 頁.
- Windelband, W. (1880). *Die Geschichte der neuern Philosophie in ihrem Zusammenhange mit der allgemeinen Curtur und den besonderen Wissenschaften, Zweiter Band: Von Kant bis Hegel und Herbart*, Leibzig: Druck und Verlag von Breitkopf und Härtel.

〔京都大学大学院博士課程・西洋哲学史〕